

---

# 養護教諭 安芸原素子

半平太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

養護教諭 安芸原素子

### 【Nコード】

N2603G

### 【作者名】

半平太

### 【あらすじ】

とある高校に勤める養護教諭、安芸原素子が経験する少し不思議な物語。彼女は靈感を持つ学生と出会い、そして…

(前書き)

拙作「扉の向こうの あなたは だあれ」のアンサーにあたる作品  
です。

http://syosetu.com/ppc/main.php  
?m=w1-4&amp;ncode=N1873G

春はきらいじゃない。新しい出会いに期待しているわけではないけど、情性に流れた付きあいを清算するいい機会。養護教諭なんて仕事に就いたのも一人になれる時と場所を手に入れたかつたから。それなのに前の学校はひどかつた。授業をさぼりたいだけの生徒達に、できの悪いサラリーマンみたいな教師達。おかげで手間がかかつたのなんのつて。今度の学校では、教師たちも、うるさい生徒たちも、保健室のことなんか忘れて自分らで好きにやっつてくれたらいいのに。

スラックスとTシャツの上に白衣をはおつて、開けはなつた窓から桜の花びらが舞いこむままにして、デスクワークにいそしむのがこの季節の楽しみ。

でも、静かな時は望んだほど永くはもたなかつた。ノックもせず  
に部屋に飛びこんできたごつつい男子生徒のせいだ。

1 .

「すんませーん、休ませて下さーい。2年F組、足代秀雄あじろひでおつていいマース。」

ぎよるぎよると目を動かせて、そいつはなんの断わりもなしにズカズカ入つて来ようとした。…はああく、やっぱりこの学校にもいた、お約束の不良学生。岩を削り落としたようなコワモテの顔、背は高すぎもせず胴長足短。ただ、体はずいぶん鍛えているみたい。動作もきびきびとして、格技のひとつもやっつていそう。

先手必勝、

「ちよつと待ちなさい。」

額に手をあて、口を開けさせる。

「熱なし、咳なし、腹痛でもなさそうだ。休む必要なんで微塵もないっ！」

射抜くほどの眼光で睨み付けたつもりだが、制服を着た北京原人は悪びれずに言った。

「やだなー仮病じゃないっすヨ。ほらこのアゴの所、羽柴はしばしってゆー凶暴な不良にパンチされたんす。手当てして下さいよ。やっぱお姉様のよーな優しいかたに看病してもらわなきゃ〜。」

こいつ目が笑ってる。

「そのコなら前に会ったわ。美術部の子だっけ？ とても凶暴には見えなかったけど。それよりお姉さんがもつと分かりやすい傷、付けたげようか？」

「わーははは、参った、降参です。安芸原素子先生あきはらもつこ、でしたっけ。たいした度胸っすね！ あ、でも俺サボりに来たんじゃないです。寝るんなら教室で寝ますから。本当は……」

扉の後ろに隠していたらしい段ボールを持ってきた。

「？」

開けてみると、…黒猫が一匹、丸くなっていた。

「昨日道で拾ったんです。はじめ気色悪いなあって思ったんですけど、コイツむちゃくちゃドジで、俺が振り返ったら車にぶつかってやんの。…専門外かもしれないけど、診てやってくれませんか？」

…ふうん、こいつ思ったよりかいいところあるじゃない。そんな言い方だけど、ちゃんと敬語も使ってる。ちょっとだけ、気に入った。

「分かった、預かったげる。その代わりちゃんと『あなたたちは授業に戻んなさい。……扉の陰のコ、居るのは分かっているのよ。』」

「？ 俺一人で来たはずだけど。羽柴でも来たんかいな？」

この目と言いつぶりは嘘ではなさそうだ。

それじゃあ『誰』が。胸の奥で何か警告音が聞こえた気がした。  
が、かまわず私は扉に近付き、そして、開けた。

ガララッ…。

軽い、目眩。…なににも、何も見えない。  
白い闇が広がっていくよう。意識が遠のき、  
透明になっていくような…。

…とん、

とん。

あ、ノックの…音？

オネガイデス、オ

ネエサン。

だれ？ 私の「心」、ノックしたの…。

オネガイ、スコシ

ダケココニ

イサセテクダサイ。

何？

…不思議。

誰か分からないけど、あなたの気持ち、

分かるわ…。

…ワタシモ。

あなたは、私。

アナタハ、ワタシ。

私は、アナタ。　ワタシハ、あなた。

「ワタシ（あなた）」は……

「ワタシ」は、会いに来たの。遠い、寂しいところから。このひとに、会いに……。

2 .

オネエサンの体はなかなか思うようには動いてくれない。なにせ久しぶりなもの。こんなに「ほんとう」の身体って重く、熱く、痛い程に神経が張り巡らされていたんだ。

あの人は前の街のプレハブで会った時と同じよう、目をギョロギョロさせ、肩をいからせている。あの時ワタシには体はなかった。怖い、思い出とともに亡くしてしまっていたわ。それでもずっとあそこで応えてくれる人を、ワタシは待っていた。

寂しくて、心細かったワタシに、言葉をかけてくれたあなた。怒ったワタシに本気でぶつかってきてくれたあなた。自分から「扉」を開けてくれた、あなた……だから。

「先生、どーしたんすか？ さっきから独り言いったり、妙な体の動かし方して。まるで操り人形の……え？」

きよとんとしている彼を、オネエサンの腕が、優しく包みこむように抱きしめる。視線は同じくらい。大好きな歌手の舟木さんより、ちよつと線が堅いかな。彼の厚い胸から伝わる鼓動が、少しだけはやくなった…。

「…連れてって、あげるね」

微笑みながら彼の耳もとでささやく。くすくす、真っ赤になった。

「え、なananんスか？ちよちよちよーつと、は、話し見えねえです！」

「ワタシ、あなたに会いに来たの。遠い、寂しいところから。

連れてってあげる。『ト・ビ・ラ』ノ・ム・コ・ウ……」

「！」

抱きしめて背中にまわした手から熱いものがしたり落ちた。オネエサンの爪が彼をひきさいたみたい。うめき声もれる。ぎりぎりとおばらが軋む音。それと一緒に彼の鼓動も弱まっていく。モウスグツレテイケル…

それなのに、彼、私を抱き返した。強い、暖かいちからで。

「…先生、あんたそのネコと同じ目えしてる…。傷ついてんのに、意地はって、そのくせメチャメチャ寂しいって。…逃げねえから、俺。一緒に居てやるよ。」

振り絞るような声で、彼はつぶやいた。

とん…とん…。穏やかなノックの音。それは彼の鼓動。それといつしよに彼の温もりが伝わってくる。ワタシは、ワタシハちからがこめられない。もうオネエサンの手を持ち上げることでもデキナイ。ホソい、泣キ声が聞こエル。

ワタシガ泣イテイル。涙、トマラナイ。トマラナイヨ。

オネガイ、モウ、ヤサシクシナイデ……。

…

もう、いい？

……ウン。

この子を、まだ連れていく気なの？

ウン。モウ、イ

カナキヤ。

…気持ち、解け合ってたとき、あなたのこと  
分かったわ。悪い気はしなかったわよ。  
でも、もしあのまま力を加えていたら…この  
腕を噛み切っても止めていたわ。

ゴメンナサイ…ゴ

メンナサイ…。

8

前のところへ戻るの？

イエ、モットア

カルイ

トコロへ、イクワ。

「オハナシシテクレテ、アリガトウ。ソシテ、ゴメンナサイ…。」

私の唇を使って、最後に彼女はそう呟いた。

3 .

白い、闇が晴れた。私の心は「私」だし、体もちゃんと動かせる。  
どうやら「ワタシ」…ノックしてきた彼女は、無事に明るい処へ逝

けたようだ。

さて、問題は血と、私の涙と鼻水でぐっちやぐちやの、この心優しき原始人。足代をどう納得させるかな。足下では黒猫がしたり顔で笑ってやがる。

少しだけ、この学校でやる気がわいてきた。勢い良く手を引き剥がし、私は叫んだ。

「少年っ！ 私に惚れるなヨ~~~~っっっっ！」

・・おわり。

(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

「扉の向こうの あなたは だあれ」の足代君のショートホラー続編です。ちょっと趣向を変えて女性の目から見た一人称で進めてみました。乱文でスンマセンでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2603g/>

---

養護教諭 安芸原素子

2010年10月28日06時30分発行